

日本哲学資料集

プロジェクトの背景を語る

J・ハイジック

James W. HEISIG

2011年春、『日本哲学資料集』が刊行された。それは世界中から協力者を募った共同作業がついに日の目を見た瞬間だった。1,360ページを数えるこの著作の背後には、まさしく日本哲学が国際化に向けて歩んできた歴史が横たわっている。以下はその最も簡潔な叙述にすぎない。

『日本哲学資料集』は数週間以内に印刷を終える。7年前に始まったプロジェクトはまさに完了しようとしているのだ。この出版にかかわったわれわれは当初から、本をたんに1冊出すだけでは決してなく、出版物と同じく出版に至る過程もまた重要なものになるだろうと考えていた。そしてこのような思いはわれわれの当初の予想をはるかに超えて正しかったことが判明した。この資料集の成立史を語ることは、哲学のよりいっそう広範で現在進行形の歴史に裨差すことになるのだが、この歴史がいまだ明確な概要を持ち得ないように、その語りは判然とせず、あらかじめこうなるだろうと予告することもできない。しかし、そのような歴史の一部となれたことは興奮に満ちた経験であり、他のなにごとにもまさって出版に至る全過程でわれわれが払われた努力に報いてくれた。

ことのおこり

日本哲学資料集を作ろうというそもそもの発案は、トマス・カスリスがハワイ大学

で哲学の准教授だった1980年にまで遡る。当時、非西洋の伝統としては中国哲学およびインド哲学が主流であり、日本哲学はいまだ認知を求めて模索を繰り返すに留まっていた。

すでに1957年に Sarvepalli Radhakrishna と Charles A. Moore が編集した『インド哲学資料集』がプリンストン大学出版部から刊行され、1963年には Wing-Tsit Chan 編『中国哲学資料集』も出版されていた。3巻本の日本哲学資料集が計画されてはいたものの出版には至らず、その欠を角田柳作、Wm. Theodore de Bary、そして Donald Keene が編集し、コロンビア大学出版部から1958年に出された『日本の伝統に関する資料集』が部分的に埋めていた。

筆者はカスリスと1980年代に対話を重ねる機会を得たのだが、彼は哲学思想だけに的を絞ったアンソロジーを作りたいと念願していた。他方、ヤン・ヴァンブラフトが所長を務めた10年間に南山宗教文化研究所は京都学派の哲学と取り組み、翻訳に注釈を加えた書籍を8冊刊行しており、多くの

若い研究者の関心をひきつけていた。こうしてよりいっそう広範な資料集を作成しようという機運が盛り上がってきた。

くわえて日本哲学への関心が高まった背景には、15回にわたって開催された国際会議すなわち「京都禅シンポジウム」の存在があった。そこでは天龍寺管長・平田晴耕老師の機知に富む指導のもと、堀尾孟、西谷啓治、上田閑照、源了圓らが集い、海外から66名、国内からは37名の研究者が招かれ、禅哲学およびそれに関連する事項を集中的に討議した。その場に最も頻繁に顔を出したのが、すくなくとも6回にわたりシンポジウムに参加した北フロリダ大学の哲学教授ジョン・マラルドであった。そこでの資料は『禅仏教の現在』という名で京都において刊行された。もっとも、1994年のシンポジウムだけは例外で、マラルドが主催してアメリカ合衆国ニューメキシコで開かれ、発表原稿は1995年にハワイ大学出版部より *Rude Awakenings: Zen, the Kyoto School, and the Question of Nationalism* の名で出版された。

カスリスと筆者が再会した1990年のシンポジウムで資料集の是非について論じる機会を得たが、その結果参加者とくに日本人研究者から励ましを受けることができた。その後数年にわたりこの話題は頻繁に取り上げられ、そのたびごとに夢の成就に向けて緻密な計画が付け加わっていった。1994年には3年後をめどにこの計画を実現させようと青写真を描いたが、計画が実行から程遠く、編集作業もわれわれ二人で管理するには手の余る規模であることに気が付くのにさほど時間を要しなかった。そこでわれわれはマラルドに加わってくれるように依頼した。マラルドが溢れかえる意気込みとともに受諾してくれたが、それは第一歩

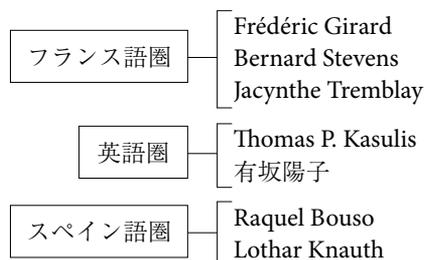
が実現味を帯びるために欠かせない刺激となった。

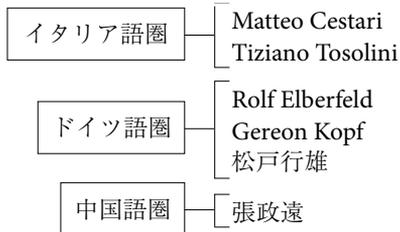
第一段階

出版計画をいっそう明確にし、なにをなすべきかをより具体的に考え、そして西洋における日本哲学研究者から助言を得るために、われわれは2003年、南山宗教文化研究所において準備会議を開催しようとした。大きく分けて古典哲学と近代哲学という2つの項目が立てられた。研究所は2年ごとに主催してきたシンポジウムの第12回目としてこの会議を実施することに賛同した。

つぎにすべきはハワイ大学出版部編集長 Pat Crosby に連絡をとることだった。その結果、彼女は好意的な返答を与えてくれただけでなく、彼女に我々がはじめて話を持ち出してからすでに10年が経過していることを思い出させてもくれた。そして事業に着手した頃に交わした書簡のなかで総頁数を800とし、価格は哲学を学ぶ学生にとって手が届く範囲に収めるということに意見がまとまった。

こうしたことすべてを念頭に置きつつ、2004年6月に欧米から13名の研究者を南山宗教文化研究所に招いた。互いの報告に耳を傾けるなかで参加者は海外において日本哲学がいかに研究され、受容され、そして期待されるかについて概ね理解するに至った。ちなみに参加者は以下の通りである。





地域別報告を一通り終えた後、ブレット・デービス、ジョン・マラルドそして筆者は「日本哲学」とはいかなる哲学であるかという点で提起された問いを吟味した。そして発表された原稿は編集されたうえで、日本私立学校振興・共済事業団の援助を得て2ヵ月後に5つの言語を保ったままで *Japanese Philosophy Abroad* として刊行された。2006年に翻訳版が『日本哲学の国際性——海外における受容と展望』として世界思想社から出版されている。

「哲学」概念を3日間にわたって論じた結果、術語の相違に留まらずアプローチの面ではさらに多様であることが判明した。刊行本の緒言から引用してみよう。

「哲学」という語の言外の意味やそれを取りまく文化的含蓄といったものが、ヨーロッパ大陸の国々の間でさえばらばらなのである。たとえば、仏教思想の含蓄は、ある言語枠では自明であるのにたいし、他の言語枠ではほとんど顧みられない。さらに、ある種の傾向に確固たる足場を与えているポストモダン思想は、国が違えば、それをもちいることによって日本哲学の研究傾向を政治的に疑わしいものにしてしまうことがある。

皮肉なことに、われわれのシンポジウムと時を同じくして南山大学において開催された日本哲学会第63回学術大会では、すべての発表が西洋哲学に関するものであり、日本哲学を扱ったものは皆無であった。

シンポジウムの最終日は京都大学の哲学研究者たちとの共催形式を取り、藤田正勝と氣多雅子が企画した、日本哲学の現代的意義に関する2時間にわたる議論がもたれた。最後を飾って西谷啓治の孫である矢田美穂が、集いを祝して旧西谷宅で茶会を催した。



「海外における日本哲学の展望」、南山宗教文化研究所、2004年6月

テクニーク・ワークショップ

2005年には南山宗教文化研究所第一種研究員である奥山倫明の助力を得て、日本学術振興会の科学研究費を申請した。その結果翌春までの予定で約1,800万円の資金が獲得できたため、3人の編集者は目次の素案を描くことにした。紙面上に構成を書き出してみるやいなや、あきらかに2つの部門において重複が認められた。われわれの希望は資料集をたんなる翻訳集とすることではなかったため、重要なテーマを見極め、それらのテーマを思想上の主要な流れへと結びつける方法を見つけ出さねばならな

ったが、その答えは直ちには出なかった。さらに取り上げる人物の取捨選択、そしてそれら人物の著作からどこを選び出すかが気の重い課題としてゆく手に浮上してきた。幸い奨励金のおかげで編集作業をより広範な視野からみつめ、プロジェクト全体を一步步ずつ再検討することができた。

まず誰を取り上げるかという点では、各領域での文献に精通している少数の人材を集め、代表作であるとともに日本思想史に詳しくない哲学研究者や学生たちの関心を惹きそうなものを見定めるよう依頼することが最も効率的だと思われた。そして最も助けが必要だと思われた「日本儒教におけ

Part I: MAJOR JAPANESE SCHOOLS OF THOUGHT

Buddhist Schools

Esoteric Traditions

Shingon

Tendai

Kamakura Exoteric Traditions

Pure Land

Zen

Nichiren

Buddhist-Based Academic Traditions

Confucian Schools

Neo-Confucian

Kogaku

Shintō Schools

Bushidō Schools

Modern Academic Schools

Kyoto School

Watsuji School

Psychology and Phenomenology-based Philosophies

Part II: PHILOSOPHICAL THEMES IN JAPANESE THOUGHT

- ☐ Nature 自然 (cosmologies, natural philosophy, metaphysics)
- ☐ Mind and Body 心身 (psychologies, epistemologies, philosophical anthropologies)
- ☐ The World Beyond 異界・天 (transcendence, the Gods, philosophy of religion)
- ☐ Language and Truth こと (logic, rhetoric)
- ☐ Morality and Cultivation 道・和・仁・自修・学 (ethics, harmony, social order)
- ☐ Aesthetics 美学

る哲学資料」に関するワークショップから着手した。2006年3月、われわれ3人の編集者は5人の研究者を招き、シカゴ北部の郊外の町、テクニーの会議場でワークショップを開いた。参加者は以下の通りである。

Peter Nosco, *University of British Columbia*
Janine Sawada, *University of Iowa*
Mary Evelyn Tucker, *Yale University*
John Tucker, *East Carolina University, Greenville*
Samuel Hideo Yamashita, *Pomona College*
Michael Marra, *University of California, Los Angeles*

二日半にわたってこのグループは息つく間もない議論に釘付けとなった。その結果、充実した選び出しを行うとともに、翻訳に関する有益なリスト、そしてなによりも重要だったのだが、編集者として方針が間違っていないという確信を得ることができた。とはいえ、儒教思想に割り当てた紙面が少なすぎたこともまたあきらかだった。あとに続くワークショップでも確認されるだろうが、総ページ数800という当初の目算は非現実的であり、また2部構成としてテーマを分割することもふさわしくないと感じ始めたのである。

第1回テクニー・ワークショップを終えるにあたり、3人の編集者は主要な思想的伝統にはそれぞれ個別の編集者が必要だと考えるに至った。翻訳の組織化および検証、術語索引の準備、そして章ごとの概要の執筆といった仕事を助けるために、そうした個別の編集者をいずれ日本に招かざるを得ず、その意味で基金を残しておかねばならなかった。

1年後の2007年3月、第2回テクニー・ワークショップが「日本思想史における科学・哲学・宗教の交流」をテーマに開催されたが、その際、日本のフォウス社の後援を受けていた三田一郎の「科学と宗教」プロジェクトから資金援助を得ることができ

た。参加者は科学史、哲学、宗教思想の専門家たちであった。その顔ぶれはつぎの通りである。

Nathan Siven, *University of Pennsylvania*
Willi Vanderwalle, *Katholieke Universiteit Leuven*
長友繁法, *Temple University*
Andrew Goble, *University of Oregon*
松丸壽雄, 獨協大学
中山 茂, 神奈川大学
John A. Tucker, *East Carolina University, Greenville*
Peter Nosco, *University of British Columbia*

われわれの目的は、科学、宗教、哲学のあいだを結ぶ古代から現代にいたる文献を選び出すことだったが、日本ではこの3領域の区分は明治初期になってようやく定まったものであるため、古い時代の文献をみればこの3領域は相互にきわめて近い関係にあるように思われた。この事態はそれぞれの学術分野へと細分化されている現代思想とは対照的である。

結局のところ、そこで選ばれた素材は『資料集』の構成を変えずに追加されることになり、科学に関しても、現代日本の生命倫理を扱った解釈学的論考を除いて、独立した項目にはしないことに決まった。大半の論者の見解では1冊にまとめるほうが日本哲学を丸ごと扱う際にはいっそうふさわしいとされたこともあって、当初は構想されていた第2部で扱うべき項目の決定については慎重な意見が出された。この議論のあとをうけて編集者間での応答が数週間続き、テーマ全体が見直された。

6ヵ月後の4月27日から29日にかけて、「日本仏教における哲学資料」をテーマに編集者はテクニーに再び集った。以下のように、仏教の各方面における数名の専門家が議論に参加するように招かれた。

Paul Swanson, 南山宗教文化研究所
David Gardiner, *Colorado College*



「日本仏教における哲学資料」、テクニー、2007年4月

Paul B. Watt, *DePauw University*
Dennis Lishka, *University of Wisconsin, Oshkosh*
Mark Blum, *State University of New York, Albany*
Mark Unno, *University of Oregon*
Janine Sawada, *University of Iowa*

どのようなものを選び出し、それをどのように並べるかを論じるかにあたり、翻訳と方法論の問題が幾度となく浮上した。本文から巻末の参考資料に至るまで、漢字表記のみならず日本語の語彙も絶対に欠くべからざるものを除いていっさい掲載しないという編集方針をとったが、それは想像していたよりもずっと難しい課題であった。文体に付せられた虚飾や翻訳者の曲解を剥ぎ取らなければならない、さらに脚注も最小限度にとどめなくてはならなかった。しかしながら、あくまで仏教の部門も「哲学資料」であり、かつ予想される読者が仏教文献について最低限度の知識しか持ち合わせていないと考える以上、実際問題としてこうした排除についてはグループ内で同意が得られた。

さらに問われたのは、われわれが翻訳に

おいて目指している文章の質である。これは出版に向けてははじめから一貫して取り組むべき課題だった。最終的にこの書物のために選ばれた322の抄録のうち、三分の二以上は初めての、あるいは新しい翻訳となった。

仏教部門のワークショップが終了するまでに『資料集』の構成は大きく変化し、われわれが当初想定してよりもずっと多くの紙面を前近代的な思想に割り当てねばならないことが判明した。さらに、「武士道」は直接取り扱わず、第2部において短く触られるべきだという合意が仏教研究者と儒教研究者のあいだに形成され、われわれはそれに従うことになった。またシカゴ大学のJames Ketelaarと相談した結果、神道についても十分な紙面を割くよう望まれた。

「近代講壇哲学」の挑戦もまた独自の問題を提起していた。一部門として扱うに足るだけの規模をそなえておらず、さらに日本的な伝統と西洋哲学からの影響が交雑しているという問題である。第4回テクニー・ワークショップは2008年3月に以下の6名

の研究者を加えて開催された。

中島隆博, 東京大学
遊佐道子, *West Washington University*
松丸壽雄, 獨協大学
Bret Davis, *Loyola College, Maryland*
Gereon Kopf, *Luther College*
末木文美士, 東京大学

従来と同じく、参加者はそれぞれ検討するための文献をあらかじめ用意しておくよう求められ、議論では誰の何を採用すべきかが論点の中核を形成した。十分に検討を重ねるためにまずプロジェクトを3つの視点から編集者が概観し、その後にそれぞれのワークショップが開かれた。カスリスが歴史的な枠組みと「哲学資料」という概念を説明し、マラルドは哲学の実用的定義を求めてその根拠をあきらかにした。そして筆者は方法論的用具、文献間相互参照、そして翻訳にあたっての原則を述べた。そして再度われわれは見過ごした点を突きつけられ、読者の視点から構成を見直す必要に迫られた。このワークショップで近代講壇哲学の起源に関する語りを20世紀における展開から分離すべきだったことがあきらかとなった。前者は並行する中国や韓国の事例への参照を含むべきであり、後者はひろ

く理解されているように近代哲学に日本が独自になしえた貢献という点に絞って考察されるべきだったのである。

フロンティア・シンポジウム

テクニーク・ワークショップと並行して、もうひとつの一連のシンポジウムが西洋の日本哲学研究者ことに若手研究者が同世代の日本人研究者と対話することを目的に開かれていた。シンポジウムそのものとその成果の出版を助けるために、可能な限り『資料集』基金からも支援を行った。こうした成果は南山宗教文化研究所から『日本哲学のフロンティア』シリーズとして以下の通り刊行されている。

1. *Frontiers of Japanese Philosophy*, October 2006, Humboldt-Universität, Berlin. Published 2006, ed. by James W. Heisig, 313 pages.
2. *Neglected Themes and Hidden Variations*, March 2007, McGill University, Montréal. Published 2008, ed. by Victor Sôgen Hori and Melissa Anne-Marie Curley, 261 pages.
3. *Origins and Possibilities*, June 2008, Nanzan Institute for Religion and Culture. Published 2008, ed. by James W. Heisig and Uehara Mayuko, 304 pages.





「日本哲学——その源泉と可能性」、南山宗教文化研究所、2008年6月

4. *Facing the Twenty-First Century*, December 2008, Hong Kong. Published 2009, ed. by Lam Wing-keung and Cheung Ching-yuen, 304 pages.
5. *Nove granice japanske filozofie*, ed. by Nevad Kahteran and James W. Heisig (Sarajevo: Nanzan and Šahinpašić, 2009), 240 pages. Selections from earlier volumes in the series, aided by a grant from the Japan Foundation.
6. *Confluences and Cross-Currents*, June 2009, Universitat Pompeu Fabra, Barcelona. Published 2009, ed. by Raquel Bouso and James W. Heisig, 383 pages.
7. *Classical Japanese Philosophy*, Tallinn University, Estonia. Published 2010, ed. by James W. Heisig and Rein Raud, 355 pages.

上記の著作はすべてオンライン上で無料にて公開されている。(PDF版は以下からダウンロードできる：<http://nirc.nanzan-u.ac.jp/publications/EJPhilosophy/EssaysInJapanesePhil.htm>)。

フロンティア・シンポジウムでは111本のぼる発表が67人によって6年間を通じてなされたことになる。いくつかのシンポジウムは『資料集』のために開かれたが、そ

れはその本を日本哲学の教員と学生にとっていっそう有益なものとするためであった。とりわけ南山宗教文化研究所で開催されたシンポジウムでは女性哲学者を扱う際に有益な助言を得ることができた。参加者のうち何人かはのちに翻訳者や歴史的情報の提供者となった。

編集作業

テクニーク・ワークショップやフロンティア・シンポジウムが進む一方で、翻訳は数百ページにおよび、その一行一行が語彙の統一、相互参照、誤謬修正のため厳正な精査を必要としていた。同時に第2部で取り上げられるべきテーマがやっと2008年に定まり、そこには5つの話題に関する以下の論考が含まれることになった。

Culture and Identity, Thomas P. Kasulis
Samurai Thought, Oleg Benesch
Women Philosophers, 遊佐道子および北川東子
Aesthetics, Michael Marra
Bioethics, 林 貴啓

たとえ遠く離れて住んでいてもかなりの

編集作業を電子技術を通じてなしうるのだが、それにもかかわらず、2005年から2009年にかけてマラルドとカスリスは数ヶ月を南山宗教文化研究所で過ごした。そこには『資料集』のために必要なすべての原典が所蔵され、かつ所内で版下が作成されていたからである。滞在中彼らもまた「文化とアイデンティティ」および「近代講壇哲学」の論考執筆へ向けた準備を行った。

先に触れたように、テクニー・ワークショップを通じてわれわれは、第1部で扱われた主要な伝統を見通し、さらに概要を作成するために章別の編集者によって支えられることが必要だと確信に達していた。幸いわれわれは望みうる限り最上の協力者を得ることができたが、彼らはそれぞれ4週間から6週間にわたり南山宗教文化研究所において編集者と密接に連携しながら、かつ翻訳者と連絡を取りながら、数え切れない詳細事項を詰めていった。滞在者を以下に記しておきたい。

John Tucker, *Confucian Traditions*,

2007年6月

Marcus Teeuwen, *Shinto and Native Studies*,

2008年11月

Mark Blum, *Buddhist Traditions*,

2008年1月および2009年1月

遊佐道子, *Women Philosophers*,

2009年9月

彼らにとっては当然のことで知る由もなかったろうが、もし彼らの助けがなければわれわれはいまなお不慣れな海域で右往左往していたことだろう。

2009年には名古屋の芸術家である浮邊加奈子を紹介された。彼女は『資料集』のために主要人物の肖像画を描いてくれることを約束してくれた。極めてほんやりとした原画をしばしば相手にしながらも浮邊はペン画による肖像画を作成し、そのおかげで

この書を仕上げるに当たって特別な風味が加わった。

いったんすべての素材が版下に組み込まれ、各著者の承認がえられた後は、全編にわたる初校作業に入った。その際、カスリスが指導する大学院生、Wamae Muriukiが援けてはくれたものの、作業量は膨大で、また調整しなくてはならない事項があまりに多かったため、編集者間での厳密な議論が避けられなかった。われわれは仕事の正確さを確保するためにも日常の雑務から離れた場所でも集中的な時間を過ごす必要があった。そのような場所はバルセロナの北西で見つかった。La Serra de Pruitと呼ばれる牧歌的な山荘で、2010年にそこで1週間を過ごすことにした。シカゴのローチ財団がそのために必要な費用を提供してくれた。また南山宗教文化研究所編集助手のデーヴィッド・ホワイトは校正に関する専門知識をもってながらわれわれの意向に沿う形で協力してくれた。

われわれがスペインに到着するまでに書物はほぼ出来上がっており、細かな点で特に急がない技巧的な事項が残されているだけだと思い込んでいた。しかし、一日12時間働く一週間がいかに貴重であるかがほとんどわかっていなかったのだ。時間がたつたびにわれわれの注意力をすりぬけていた不統合が表面化してきたのである。用語集と索引をいかに構成するかを夕食後も議論するなかで、「テーマ」の問題が再び浮き上がってきた。全編を網羅した用語集に登場する術語を文書のなかでマークしただけでは不十分であった。当初のテーマはABC順に要旨を述べるような索引を超えて、より組織的に取り上げられなければならないかった。

最終的に、より進んだ理解にいたるテー



マ別の索引が必要だということで同意した。つまり『資料集』の全内容が支配的な西洋哲学の範疇よりもむしろ日本哲学原産の概念を導くように組み立てられていると思わせる索引が必要だった。テーマ別索引のほしいの枠組みは作られたが、カスリスが詳細を詰めるため11月に南山に戻ってきて初めてこの索引は最終的な形をあらわにした。

カタロニアで1週間を過ごしたが、そのあいだに La Serra de Pruit の管理人である Jordi Serch と Elisabet Ibañez はまるで王様に仕えるようにわれわれに給仕してくれ、また邪魔者が入らない贅沢な環境で働くことができるように、およそ想像することすらできなかったまでにすばらしい空間と自由を提供してくれた。どこに目を向けようとただひたすら畑と山があるだけだった。夏の暑さをしのぐにたる高地に位置し、沈黙に漂うのはただ羊の鳴き声のみ。それまで、そしてそれ以降も体験したことがない色彩の鮮やかさのなかにわれわれは紛れ込んだのだった。

そこではごくわずかの点で章別編集者の助けを得るためにインターネットに接続した以外は、ただひたすら、原典にあたってこそはじめて解決できるような多くの問題と取り組んだ。われわれの共同作業はきわ

めて手際の良いものであったため、多くの点で記憶は常に新しく、頻繁に立ち止まって次回の参照に備えた記録を作るような無駄を省くことができた。同時に、1,300 ページを超えるテキストを整然と読み進め、かつ互いの仕事をチェックするということは、後回しになる仕事が多くなることを意味した。日一日と

ただらと続くにつれて、やるべき仕事の膨大さをなんと過小評価していたことかと、われわれは互いに幾度となく苦笑しなくてはならなかった。

4 日目にわれわれは直線距離で 6 キロ、自動車ですぐの距離にある Tavertet という小さな町で昼食をとった。じつはこの遠出には筆者の個人的な理由があった。古い友人で、カタロニアの哲学者にして神学者であるライモン・パニカルに別れを告げるためである。去る 1 月に彼はあらゆる公の生活から隠退する旨を書き送っていた。20 年



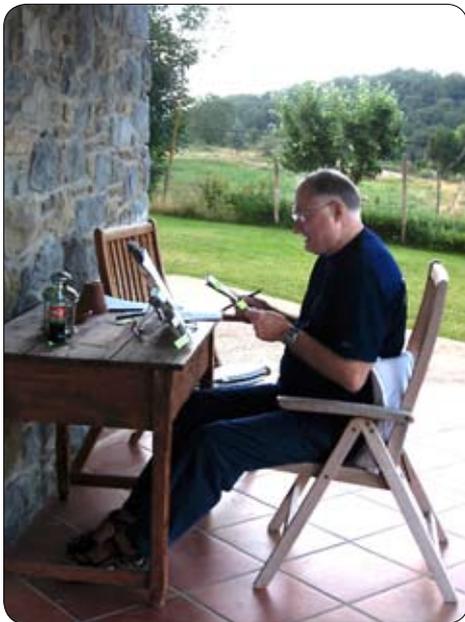


以上にわたって自宅で定期的に訪問客と面会してきたが、文面はそれがもはや無理となったことを意味していた。90歳になって健康を損ねたため、そう決断せざるをえなかったのである。それでもなお彼はわれわれを受け入れてくれ、生涯をかけて愛した膨大な書籍に囲まれた書齋で忘れがたい半時間を過ごさせてくれた。パニカルは筆者

が思い出せるその姿とは異なりいっそう静かに、かつ遠い存在となっていたが、しかしマラルドを思い出すのに時間はかからなかった。二人は10年前にオックスフォードで開かれたある学会でほんのわずかだが面識を得ていたのである。パニカルはいつもどおりカタロニア語と英語を混ぜ合わせながら話したが、それは不思議と超然とした語り口だった。筆者がバルセロナの知人から預かってきた挨拶をパニカルに告げると、彼は静かに応えた。「あらゆる人が、そしてあらゆるものが今のわたしには同じ人であり同じものなのです」と。

筆者は彼の額に口付けしたが、それが最後になるとわかっていた。そして実際そうになった。2週間後にパニカルは亡くなった。

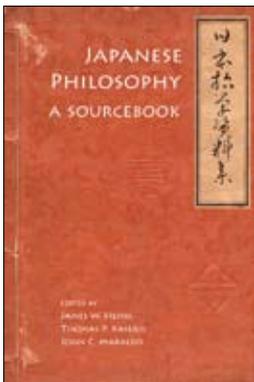
筆者にとってこの最後の訪問は『資料集』の営みにおけるたんなる間奏ではなかった。パニカルは筆者がバルセロナで研究休暇を過ごしていたときに執筆した著作 *Filósofos de la nada* に紹介文を書いてくれたし、「哲学」は知へ向かう知的困難を伴ったただひとつの道だという彼の確信をめぐって筆者としばしば議論した仲でもあった。彼は生



涯にわたって情熱的に東洋がもつ豊かさへ向けて道を開こうとした。並外れた数に至る著作と彼の抗しがたい人格的魅力によって他人のなかに呼び起された情熱ともなった。ともに強く関心を抱くことがらについて夜遅くまで話し合うなかでいったい何本のワインを空にしたことか、どれだけ多くの時間を過ごしたことだろう。こういった思い出に満ちた Can Felo という山あいの屋敷に協力者を連れてくることができ、筆者は大いに誇らしいし、また満足している。

Jordi と Elisabet に別れを告げた後、われわれはバルセロナに戻り、そこで Victoria Cirlot および Amador Vega と食事をともにした。彼らとは京都大学の上田閑照による講義を含む日本哲学関係の公開講座を企画したときにしばしばともに働いた仲であった。われわれはスペインでのヘルダー社編集長を務める Raimund Herder と食事をともにしたこともあったが、そのときスペイン語版『資料集』の話を持ち出してみたところ、彼は大いに関心を示し、ただちにすらすらと協力が期待できる人々の名前を書き出した。

数ヶ月後にサントリー文化財団からハワイ大学出版部に出版助成として 7,400 ドルが支給されるという知らせが届いた。



Japanese Philosophy: A Sourcebook,
ed. by James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo.
Honolulu: University of Hawai'i Press, 2011. 1,360 pages.



今になってみれば、かくも大勢の翻訳者とともに働き、また彼らの主義や個性をわれわれのそれと整合させるという営みは、想像していたほど骨の折れることではなかった。もちろん意見の違いは数多く、また妥協に迫られるのも毎度のことだった。小競り合いにはたしかに苦労させられたが、世界中で日本哲学を学ぶ学生と研究者の共同体から得られた支持と協りに匹敵するほどのものではなかった。実際、『資料集』プロジェクトはこのような共同体の基盤を押し広げ、さらに日本および西洋で若い研究者と経験をつんだ研究者のあいだにいっそうの交わりをもたらすことをわれわれは確信している。

もちろん『資料集』はその功罪に向けて投げかけられる批判的評価から逃げ出してはならないであろう。しかし長年にわたる準備のあと出版に至ったこの歩みは、いまや豊かな実りの秋を迎えたのである。

—————
* 文中の人名には敬称を略しました。

じえーむず・はいじっく
南山宗教文化研究所第一種研究所員
(翻訳：寺尾寿芳)